

### 上演⑬ 金沢商業高校「子どものままでいて」

これはまさに等身大の高校生の物話。たった3人の出演で作品を創作しようとした決意に賞賛を送りたい。

見た目はミニマム演劇ながら、冷静で熱い俳優陣の集中力は素晴らしかった。人同士の会話が自然であり、3人の中の呼吸・共感・距離感などが非常に強く感じられました。

導入部分の1場では他愛もない会話が舞台稽古中の調光室で行われ、情報がさりげなく撒かれている以外は、一見退屈な作品にも思えました。卒業を控えた普通の高校生が思う部活、就職、家族の話が心地よいテンポで流れますが、このままではこの作品はほぼ印象に残らなかったかもしれません。しかし、ここから俄然この3人芝居の凄みが徐々に露わになってきました。

2場の佐藤家の居間の場面は座り芝居のため動きも極端に制限されましたが、俳優陣が緊張感と感情のリレーを切らさず微かな感情もしっかりと演じ切って見事でした。背を向けた佐藤に対してゆっくりと手を伸ばす山田の動きと表情はとても印象に残りました。

良い表現が見つかりませんが、少し大袈裟に言うならば無音の力・不動の力・不飾の力を体現した作品だと思いました。3人の俳優にかかる力がとても大きくてゴマカシの利かない中、その状況に打ち勝った俳優陣の集中力は素晴らしかった。

黒い箱馬と板のみで調光室や座卓のある居間を作り上げる展開は、3人で転換するには丁度良い場所設定でした。転換に時間をかけて間伸びさせるより、必要最小時間で次に繋げようという意識が見えて、しっかり考えた跡が伺えました。ただし、曲で繋いでましたが、3場への転換は少し時間がかかっていた残念でした。

気になった箇所を挙げるならば、最後の方で山田と清水が奥に歩いて行って、前に振り返って歩き戻る動きです。これは再考の余地があるかも知れません。あの動きだけが記号的に見えて、それまでの芝居と違和感を感じました。本番当日の朝で「外」であるということだけ伝わればストーリーに支障はなかったと思えたので、少し広めに動き回るなどの自然な動きだけでもやり通せたかもしれません。